

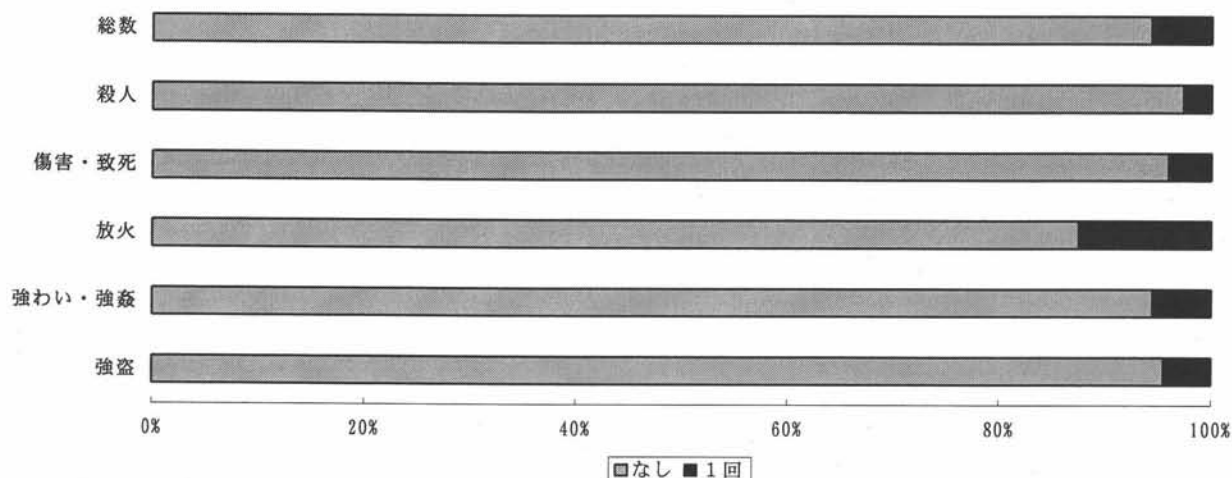
表99 犯罪群別発病前強盗前科歴数

	総数	なし	1回
総 数	158	149	9
殺 人	37	36	1
傷 害・致死	49	47	2
放 火	32	28	4
強わい・強姦	18	17	1
強 盗	22	21	1

注 1 法務総合研究所の調査による。

2 不明を除く。

図102 犯罪群別発病前強盗前科歴数



注 法務総合研究所の調査による。

## (2) 問題行動歴

前科前歴非行歴の形で顕在化する前の段階でも、犯罪へつながる異常な行動が現れる場合があるものと考えられる。

飲酒の影響による暴力行為や家庭内での暴力行為が典型であるが、飲酒の影響の場合を除外したものを「問題行動」、飲酒時の行動を「問題飲酒癖」と定義付けて、その態様と発生時期等について各群別に分析を試みた。

### ア 問題行動歴

#### (ア) 問題行動形態

飲酒時の問題行動以外の「問題行動」の形態を、対象記録から抽出し（複数選択可であり、問題行動合計と対象者数合計とは一致しない。）、分類した結果を示したものが、表100、図103である<sup>(注59)</sup>。

(注59) 「対人関係離脱」とは、「引きこもり」「家出」「放浪」を、「対人暴力」とは「他人（家族を含む）の身体への暴力行為（セクハラ行為も含む）」を、「暴言」とは「脅迫」「侮辱」のほか、「罵詈雑言」「罵倒」等犯罪にはならないもののいわゆる「言葉の暴力」を含むものを、「自殺企図」は自殺を試みるあるいは試みようとした行為を、「自傷行為」は自殺以外の自己の身体を傷つける行為を、「対物暴力」は、「自己又は他人の物に対する損壊行為」を、「夜間徘徊等異常行動」は夜間徘徊等、「他人に危害を加えてはいないが、危険を及ぼす可能性を感じさせる異常な行為」を、「覚せい剤使用」「有機溶剤使用」「大麻使用」「他薬物使用（犯罪を構成するか否かを問わないが濫

全体として見ると、「対人暴力」、「対物暴力」が多い。

各群ごとに見てみると、殺人群では、「対人暴力」「暴言」といった直接的に暴力犯罪につながりかねない暴力的問題行動が他の群に比して群を抜いて多いのが目に付く。傷害・致死群では、「対人暴力」「対物暴力」が、殺人群同様に多いものの、「暴言」は少なく、むしろ、「夜間徘徊等異常行動」や「薬物濫用（覚せい剤・有機溶剤・大麻・その他薬物）」のような暴力犯罪への間接的影響が懸念される問題行動が殺人群より多い。放火群では、「対人暴力」「対物暴力」が多く、特に「対物暴力」は、他の群に比して目立って多い。放火が、「物に対する犯行」であることとの共通性が注目される。強わい・強姦群では、「対人暴力」が多いものの、それほど際だった特徴はない。強盗群では、「対人暴力」のほか「薬物濫用」も比較的多い。

問題行動の内容の詳細を見ていくと、刑事事件として顕在化していないにもかかわらず、非常に悲惨な事例が多いことに驚かされる。

例えば、以下のような事例があったことが記録上から認められた。

#### 【殺人群】

〔はさみをもって家族に襲いかかる。〕、〔自分の思い通りにならないと大声で騒ぎ暴力を振るう。〕、〔幻覚に支配されて旅館の天井を破るなどの暴力行為をする。〕

#### 【傷害・致死群】

〔妻に対する暴行が頻繁で、そのたびに妻は家出して息子の家あるいは知人方へ避難し、ついには妻が耐えかねて農薬服毒自殺未遂をするに至っている。〕、〔被疑者が暴れて家族に暴行をふるうために、元々の住人であった被疑者の妻の弟一家は家を捨てて放浪状態に陥っている。〕、〔被疑者の父親は、発病した被疑者に包丁で背中を刺され、そのショックなどから家出し、公園の便所で首吊り自殺した。〕、〔夜になると突然わめき出し、物を投げる、迷彩服を着てピストル（模造）ガス銃・手錠などを携帯して酒を飲み歩く、公園内の池に投網をして鯉を捕ろうとするなどの異常行動がある。〕、〔妻に対する嫉妬に基づく殴る蹴るの暴行が多数回ある。〕、〔覚せい剤使用後に暴れたり他人の住居に侵入したりする。〕、〔肝炎で病院入院中に看護師に暴行・暴言・脅迫をし、その一方で病院内で覚せい剤を注射する。〕、〔倉庫の鍵を壊す、ドアを蹴る、自転車のタイヤの空気を抜く、花壇の花を全て切り取る、スプレー缶を爆発させる等の異常行動がある。〕、〔夜間大声で叫んで徘徊したり、自宅の床下等に穴を掘るなどしている。〕、〔家に石を投げる、ガラスを割る、ガソリンを道にまいて燃やす、ナイフで脅そうとして持ち歩くなどする。〕、〔電話線を切断したり、自宅の壁等を殴る蹴るして破損させる。〕〔町内で暴力をふるい（ゴルフクラブで自販機のガラスを叩き割る・近隣住民を手拳で殴打する。）盆踊りを中止させる等素行の悪さで有名であり、逮捕されても精神障害者として釈放されては悪事を働く被疑者に業を煮やし、その追放を目指す「明るく住み良い〇〇町を作る会」が結成されている。〕

#### 【放火群】

〔家の廊下の壁を殴ってぶち抜く。〕、〔家族が言うことを聞かないと自宅の窓ガラスを割ったり、ふすまを壊す、紙を燃やす、他人のアパートの出入り口にペンキをぬり、痰や唾をはく等の嫌がらせをする。〕、〔シンナーを吸引して人格が変わり、家庭内暴力、刃物を持って暴れるため母は刃物を隠す。〕、〔自室に灯油をまいて放火したり、父の車を石でつついて傷だらけにする。〕、〔壁やドアをたたき壊して「母の命

---

用と見られるもの、例えば睡眠薬濫用等)〕は、犯罪としての認知・立件とは関係なく、このような薬物濫用の事実がある場合を、「暴力団・暴走族加入」は暴力団の構成員ないし準構成員となるか、暴走族の構成員となったものを、「その他」は、前記範疇以外の行動で異常性がうかがえるものを指すものとして分類している。

を取る」と暴れ、敵意をむき出しにするので、母と妹は夜逃げして別居し、自宅に戻れず。）、〔母は殴られて鼓膜が破れて手術し、家族は被疑者を恐れている。〕、〔母は被疑者の暴力をおそれて自宅から避難し、妹方へ身を寄せ、父ないし、被疑者の内妻も被疑者の暴力をおそれて避難、父は暴力をおそれて別に住宅を借りて身を隠す。〕

#### 【強わい・強姦群】

〔家族に対して「殺してやる」と叫んで包丁をふり回す。〕、〔覚せい剤を使用して電話コードを引き抜き、テーブルをひっくり返して暴れ回る。〕、〔学校の窓ガラスや壁を壊す、就職後はイライラすると家庭内で暴れて物を蹴る、壁や自動車を凸凹になるまで壊す。〕、〔十数回にわたり北海道内を放浪、精神薄弱者施設内でも女性の体に触れ、スカートの中に手を入れる、男性の下着をおろして陰茎を弄ぶ行為をし、援護施設を渡り歩き、無断離園繰り返す。〕、〔被疑者は、家族や近隣住人に対して迷惑行為・暴力をふるい、近所では恐れられる人物となり、飲酒して徘徊しているという情報が入ると近隣の飲食店は鍵を閉めて防衛する状態〕

#### 【強盗群】

〔給料等まとまった金が入ったり、仕事が嫌になると家出をし、全国を徘徊すること20数回〕、〔自分の意に添わないと壁を叩く、硝子を割る、扇風機を壊す。〕

以上列举したように、具体的な事例はほとんどが深刻な事案であり、何らかの暴力犯罪に該当するものがほとんどである。犯罪として認知されていない深刻な犯罪の暗数が相当数に上っていることがわかり、再犯として認知される前にも、危険な状態が既に現れていることになる。このような時点で、医療行為なり刑事司法の手を借りるなり、あるいは民間の援助機関等の助けを借りるなりして何らかの措置を講じることができれば、再犯の数、特に重大犯罪の数は少なくなるのではなかろうか<sup>(注60)</sup>。

表100 犯罪群別・問題行動形態別人員

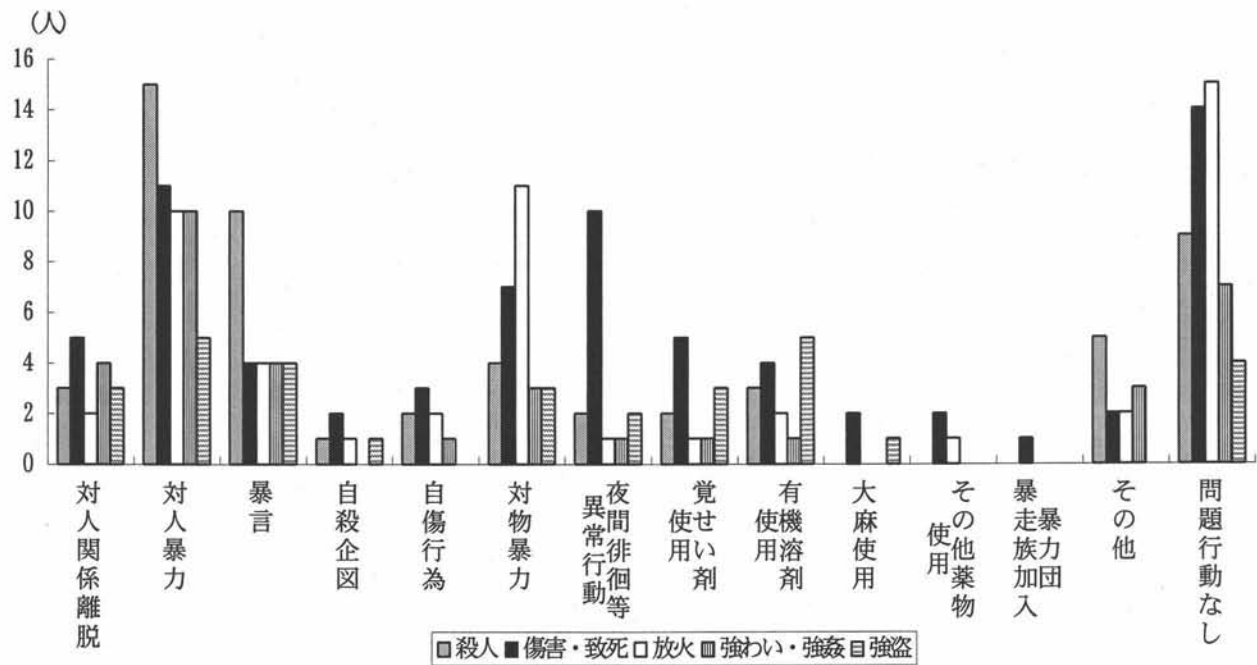
	対人 関係 離脱	対人 暴力	暴言	自殺 企図	自傷 行為	対物 暴力	夜間 徘徊 等異 常行 動	覚せい 剤 使用	有機 溶剤 使用	大麻 使用	その他 薬物 使用	暴力 団暴 走族 加入	その他	問題 行動 なし
総 数	17	51	26	5	8	28	16	12	15	3	3	1	12	49
殺 人	3	15	10	1	2	4	2	2	3	0	0	0	5	9
傷 害・致死	5	11	4	2	3	7	10	5	4	2	2	1	2	14
放 火	2	10	4	1	2	11	1	1	2	0	1	0	2	15
強わい・強姦	4	10	4	0	1	3	1	1	1	0	0	0	3	7
強 盗	3	5	4	1	0	3	2	3	5	1	0	0	0	4

注 1 法務総合研究所の調査による。

2 複数回答である。

(注60) 重大犯罪として認知される事件以外のいわゆる「暗数」がどの程度あるかについては、特別調査によらないと正確なところは判明しないが、一般的には、傷害などでは家族が被害者となっている場合には暗数となっている割合が高いのではないと思われる。更に加えて、被疑者に精神障害が存在する等の場合には、かなり程度のひどい場合であっても、父母ら家族の過度の愛情や事件化されて世間の注目を浴びることを恐れるあまり、犯罪の被害にあってもこれを申告せずに隠す傾向が一段と強まるものと思われるので、本件のような再犯者の場合にも、被害の申告率はより低く、暗数は多いと推測される。後述の問題行動の被害者に家族等が多いこともこのような側面を裏付けている。

図103 犯罪群別・問題行動形態別人員



注 1 法務総合研究所の調査による。  
2 複数回答である。

(イ) 問題行動初発年齢

問題行動が初めて周囲の者（通常は同居親族等の保護者であろう。）に覚知された時の被疑者の満年齢を「問題行動初発年齢」として、その年齢層の分布を見た結果が、表101・102、図104、平均値は図105のとおりである<sup>(注61)</sup>。

20歳代までに問題行動が覚知されている者の割合は、問題行動があった者（不明を除く）の60％を超えている。群ごとに見ると、強わい・強姦群，強盗群では，20歳代で問題行動が覚知された者の割合が85％を超える高率を示すなど早期から問題行動が出現する傾向がある。後述する発病年齢層と対比してみると，当然ではあるが，早い時期から発病が認められる者が多い。強わい・強姦群と強盗群では，問題行動も特に早い時期から認められる。問題行動が現れた時点から，医療行為ないしは刑事司法による適切な措置を講じることができれば，再犯の発生状況も異なった可能性もあったものと思われる。

表101 犯罪群別問題行動初発年齢

	総数	0－9歳	10－19歳	20－29歳	30－39歳	40－49歳	50－59歳	60－69歳	70歳以上	平均
総数	87	1	31	25	16	8	4	1	1	26.6
殺人	25	1	10	6	5	1	—	1	1	26.0
傷害・致死	24	—	5	6	5	6	2	—	—	31.5
放火	17	—	6	5	3	1	2	—	—	27.2
強わい・強姦	7	—	4	2	1	—	—	—	—	20.0
強盗	14	—	6	6	2	—	—	—	—	21.6

注 1 法務総合研究所の調査による。  
2 不明は除く。

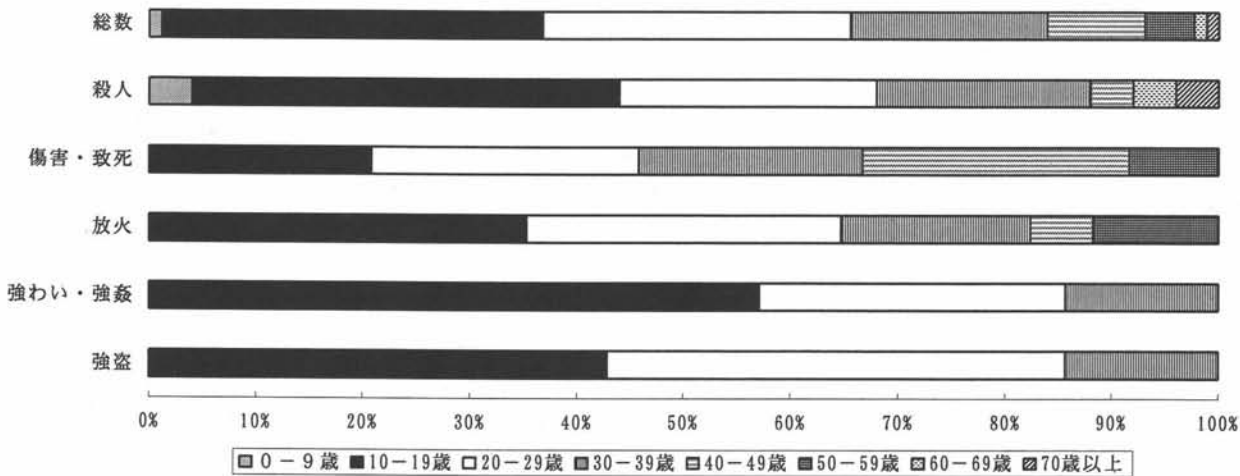
(注61) 問題行動なしの場合と初発時期が不明な場合とを除く。複数の問題行動がある場合は，最初に覚知された問題行動をもって初発時期とみなした。

表102 犯罪群別問題行動初発年齢（累積百分率）

	10歳未満	20歳未満	30歳未満	40歳未満	50歳未満	60歳未満	70歳未満	70歳以上
総 数	1.1	36.8	65.5	83.9	93.1	97.7	98.9	100.0
殺 人	4.0	44.0	68.0	88.0	92.0	92.0	96.0	100.0
傷 害・致死	—	20.8	68.0	66.7	91.7	100.0	—	—
放 火	—	35.3	64.7	82.4	88.2	100.0	—	—
強わい・強姦	—	57.1	85.7	100.0	—	—	—	—
強 盗	—	42.9	85.7	100.0	—	—	—	—

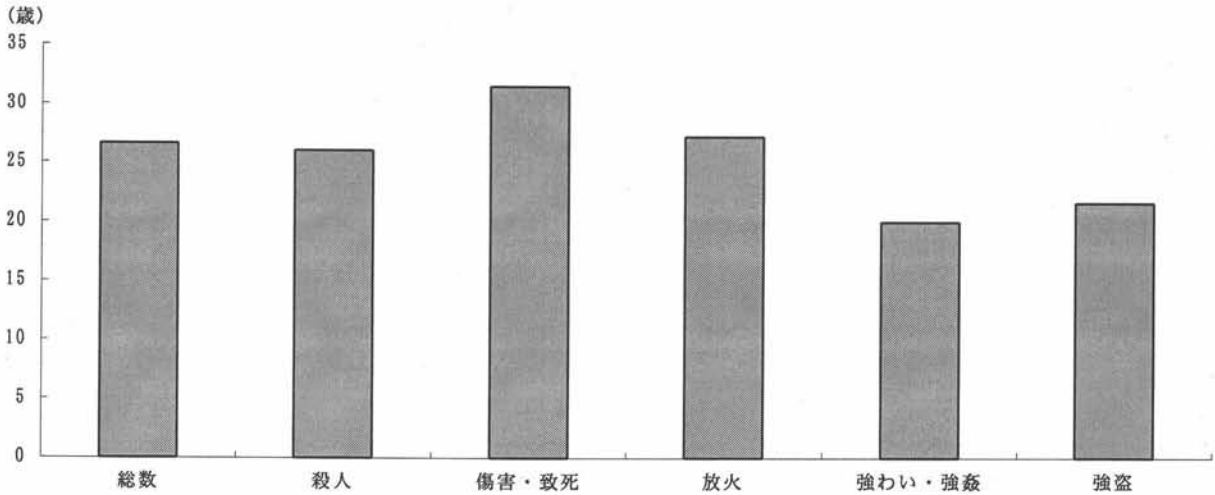
- 注 1 法務総合研究所の調査による。  
2 年齢の低い層から累積した百分率である。  
3 色をつけたセルは、累積した百分率が60%を初めて超える年齢層を示す。

図104 犯罪群別・問題行動初発年齢別構成比



注 法務総合研究所の調査による。

図105 犯罪群別問題行動初発年齢 平均値



注 法務総合研究所の調査による。

(ウ) 問題行動初発期間

問題行動の初発時期と前科歴の先後関係については、表103、図106である<sup>(注62)</sup>。殺人、放火、強わい・強姦、強盗群では、「直2－直1」の間に、傷害・致死群では、「直1－再犯」の間に、問題行動が覚知された者が最も多い。

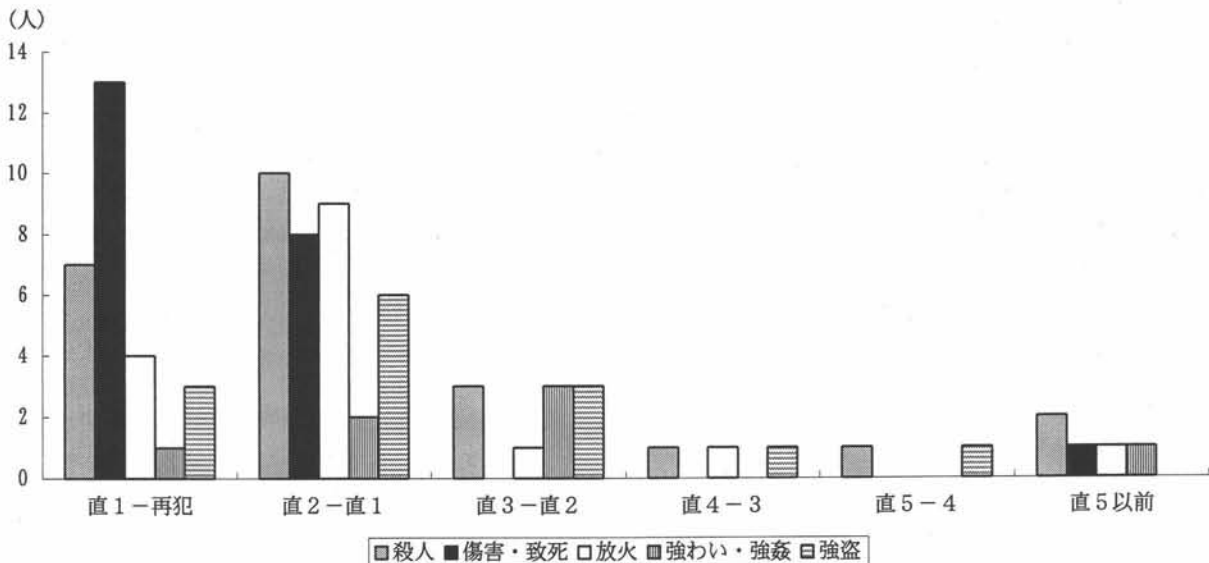
前者の群では、問題行動を覚知した時点から以降に、直近1と再犯の2つの重大犯罪がなされており、後者の群では、再犯がなされており、問題行動が覚知された時点で医療行為ないしは刑事司法により、適切・有効な措置を講じることにより再犯が防げた可能性があると思われる。

表103 犯罪群別問題行動初発期間

	総数	直1－再犯	直2－直1	直3－直2	直4－3	直5－4	直5以前
総 数	83	28	35	10	3	2	5
殺 人	24	7	10	3	1	1	2
傷 害・致 死	22	13	8	—	—	—	1
放 火	16	4	9	1	1	—	1
強わい・強姦	7	1	2	3	—	—	1
強 盗	14	3	6	3	1	1	—

注 1 法務総合研究所の調査による。  
2 不明、問題行動なしを除く。

図106 犯罪群別問題行動初発時期



注 法務総合研究所の調査による。

(エ) 問題行動の被害者

問題行動について被害者がある場合（対人・対物暴力行為、暴言等）の被害者の種別を「家族」（同居家族）、「近隣住民」（面識ある場合に限る）、「ほか知人」（前記二種に該当しない知人）、「無差別」（面識なし）に分類し、その分布を見たところ、表104、図107のとおりとなった。

(注62) 初発時期で「直1」とあるのは、再犯の直近の重大前科歴、「直2」は「直1」から遡った直近重大前科歴、以下同様に「直3」、「直4」、「直5」となる。

全般的に、家族と並んで家族・隣人以外の知人が被害者になる場合が多いが、殺人群では特に家族が被害者の場合が突出しており、いわゆる家庭内暴力等の犠牲になっていることが裏付けられている。

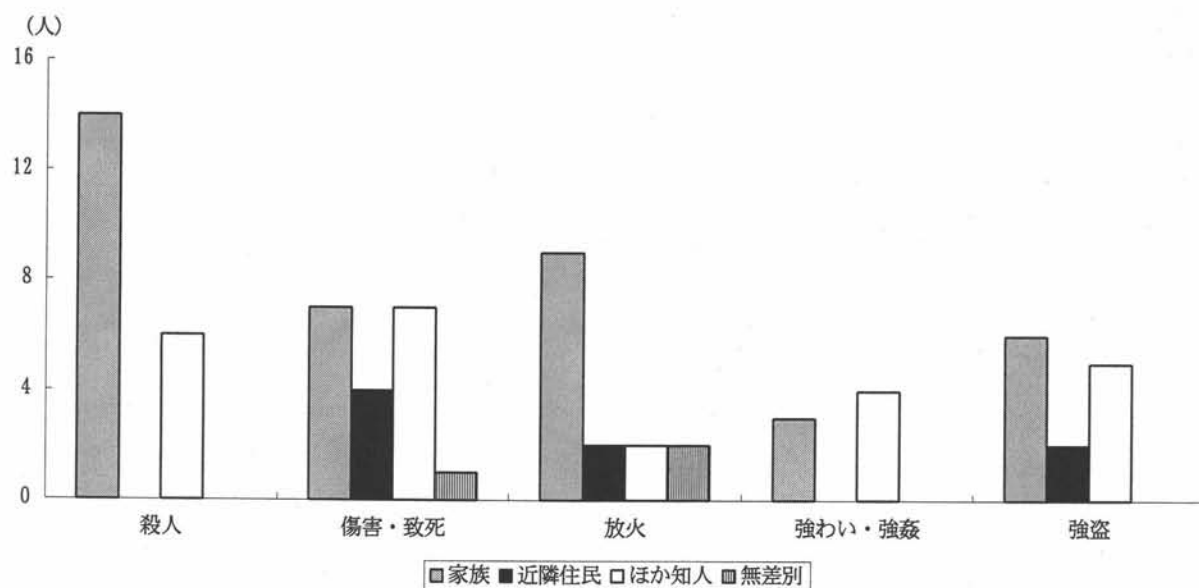
前述のとおり、事例を個別に見ていくと、家族、特に父母が悲惨な目にあって苦しんでいる事例が散見されてその苦労が忍ばれるところである。また、中には、被害者が被疑者の相談相手となっていた保護協力者（公民館館長・教育委員会嘱託職員で人権問題啓蒙活動団体の講師）という事案（殺人群）も見られ、精神障害者の保護の難しさを示している。

表104 犯罪群別問題行動被害者種別

	総数	家族	近隣住民	ほか知人	無差別
総 数	74	39	8	24	3
殺 人	20	14	—	6	—
傷 害・致 死	19	7	4	7	1
放 火	15	9	2	2	2
強わい・強姦	7	3	—	4	—
強 盗	13	6	2	5	—

注 1 法務総合研究所の調査による。  
2 問題行動なし、不明を除く。

図107 犯罪群別問題行動被害者種別



注 法務総合研究所の調査による。



## イ 問題飲酒癖

### (ア) 問題飲酒癖行動態様

飲酒時に暴力行為等を行うなどの異常行動を行う性癖を「問題飲酒癖」とし、「粗暴（凶器持ち出し）」（飲酒時に酩酊して凶器を手にして暴れる傾向があるもの）、「粗暴（左記以外）」（飲酒時に酩酊して暴れる傾向があるが、凶器を持ち出すまでには至らないもの）、「放火癖」（飲酒時に放火をする傾向があるもの）、「ほか異常行動」（前記以外の異常な性癖）、「飲酒時問題行動なし」に分類したものが、表105、図108である。

飲酒時の行動について判明した者のうち、飲酒時に粗暴行為（人又は物に対する暴力行為）をする性癖がうかがわれた者等異常行動があると認められた者は、10ないし50%程度であり、殺人、放火、傷害・致死群での割合が20%を超えるなど比較的高く、取り分け、殺人群では、50%以上を占めるなど突出している。

具体的事例を検討すると、俗に「酒乱」と言われているアルコール中毒の場合が多いが、その中でも、危険性や再犯可能性の面で非常に問題のある事例が多い。

例えば、以下のような事例がみられた。

【殺人群】「飲酒の上、父・母・弟に棒・刃物等で暴力を振るう。」

【傷害・致死群】「糖尿病・肝硬変で通院し、断酒会に行きながらもたびたび大酒を飲んで暴れる。」「飲酒しては暴れるので家主は被疑者を退去させたいが、本人には怖くて言えない状態。」「飲酒してはナイフを持ちながら徘徊する。」「飲酒による幻覚から鉄パイプを振り回す。」

【放火群】「酒を飲んで妻を殴る、髪の毛をつかんで引きずる、物を投げつける。」「大騒ぎしたり暴力をふるったりするため、アパートにいらなくなり、転居・飲酒の上で自殺未遂数回・交際相手に包丁を突きつけて傷つける。」「毎日飲酒・飲酒しては暴言を吐いたり、嫌がらせをしたり、執拗に金を無心したりするため、母・姉夫婦等は恐怖を感じて被疑者から逃げて他の兄弟のところへ避難。」「飲酒の上些細なことに立腹して暴力をふるい、祖父母と父が被疑者の暴力で負傷して入院。」「『こんな家燃やすの簡単だ。』と暴言を吐く。」「父が渡した金が少ないと言って激昂し、25インチもあるテレビを持ち上げて床に投げつけて壊し、逃げた内妻を追って寺の玄関に石を投げ込んで壊す。」「内妻が被疑者に殴られて負傷した際に被害届を出したことを詰問して洋酒瓶で殴る。」「泥酔して路上で暴れて保護歴9回を数え、保健所に協力求めるも『措置入院も任意入院も不能』との回答。」「覚せい剤の幻聴が出てから怖さを紛らすため飲酒量が増大し、飲酒すると幻覚が強くなり暴行、幻覚が出ると包丁・鉄パイプ等を携帯して徘徊」

【強い・強姦群】「酩酊し、暴言・暴力・首を絞め、殴る、包丁・金槌持参で徘徊、父母は被疑者に対して恐怖心を抱いており自室に鍵をかけて寝てトイレにも行けない状態。」「飲酒するな」と注意すると暴力をふるうため缶ビールを買い与えている。」

【強盗群】「飲酒の上、粗暴となり家具を破壊し、家族に暴力をふるう。」「飲酒して暴れて母に包丁投げつける。」

以上挙げたとおり、家庭内で飲酒酩酊しては、家族に対して粗暴行為を繰り返し、そのために家族が負傷しながらも被害届を出さず（あるいは、被害届を出したために暴力を振るわれる場合もある。）、息を潜めて被疑者の行動を見守っているという悲惨な状況が少なくないことが明らかである。

これらの飲酒時の行動が、刑事事件として顕在化せず、暗数になっていることにかんがみれば、この問題飲酒癖が出た時点で、医療ないしは刑事司法による適切な措置がなされ、あるいは、民間の何らかの援助機関等による援助があれば、再犯の発生をおさえられた可能性があるだろう。

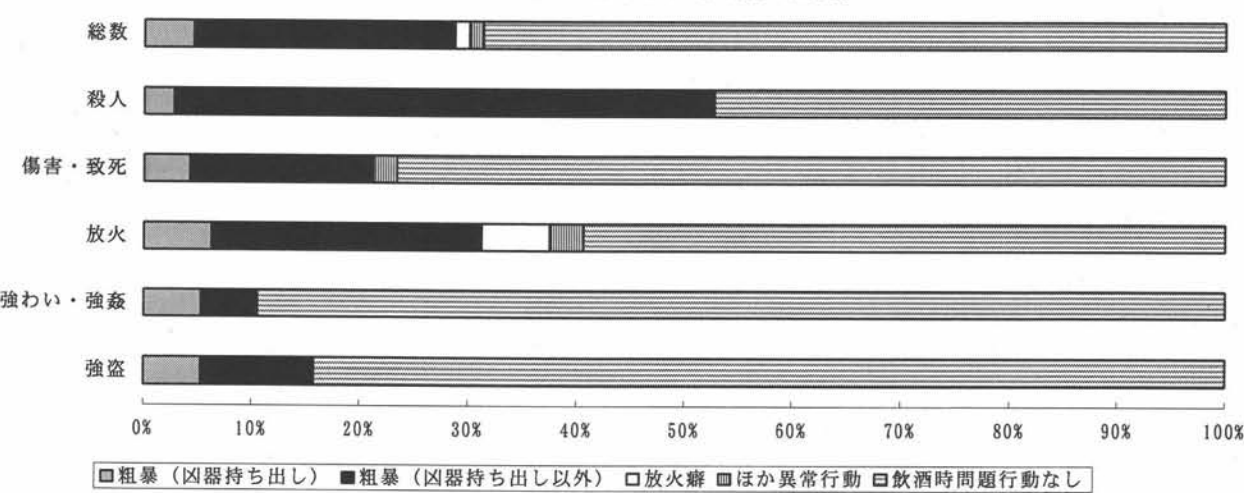


表105 犯罪群別問題飲酒癖行動態様

	総数	粗暴（凶器持ち出し）	粗暴（凶器持ち出し以外）	放火癖	ほか異常行動	飲酒時問題行動なし
総数	153	7	37	2	2	105
殺人	36	1	18	—	—	17
傷害・致死	47	2	8	—	1	36
放火	32	2	8	2	1	19
強わい・強姦	19	1	1	—	—	17
強盗	19	1	2	—	—	16

注 1 法務総合研究所の調査による。  
2 該当なし、不明は除く。

図108 犯罪群別問題飲酒癖行動態様



注 1 法務総合研究所の調査による。  
2 不明は除く。

(イ) 問題飲酒癖出現年齢

問題飲酒癖の出現年齢の分布は、表106、図109である。

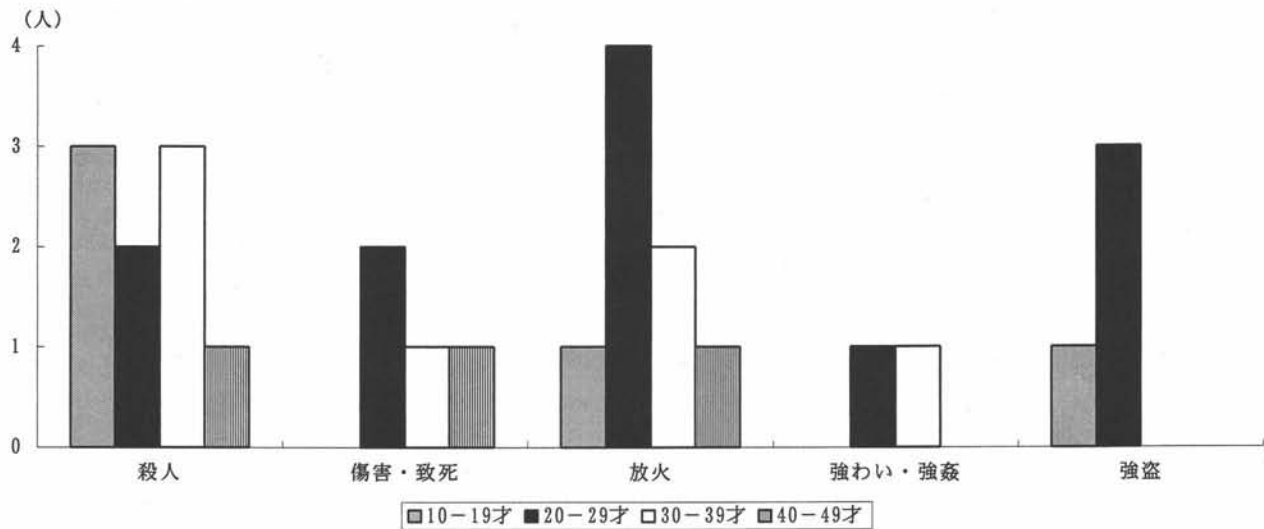
出現年齢が記録中から判明した例が少なかったため、一般的傾向をうかがうのは困難ではあるが、相当数が、30歳代までに飲酒癖に問題があることが判明していることが分かる。

表106 犯罪群別問題飲酒癖出現年齢

	総数	10－19才	20－29才	30－39才	40－49才
総数	27	5	12	7	3
殺人	9	3	2	3	1
傷害・致死	4	—	2	1	1
放火	8	1	4	2	1
強わい・強姦	2	—	1	1	—
強盗	4	1	3	—	—

注 法務総合研究所の調査による。

図109 罪種別問題飲酒出現年齢



注 法務総合研究所の調査による。

(ウ) 問題飲酒癖出現期間

問題飲酒癖と前科歴の先後関係については、表107、図110のとおりである。記録から出現期間の判明した例が少ないため、傾向については判然としないが、最終前科歴（直近1）以前に問題飲酒癖が出現している者が相当数あり、これらに対して、何らかの適切・有効な措置を講じていれば再犯が避けられたのではないかと推測される。

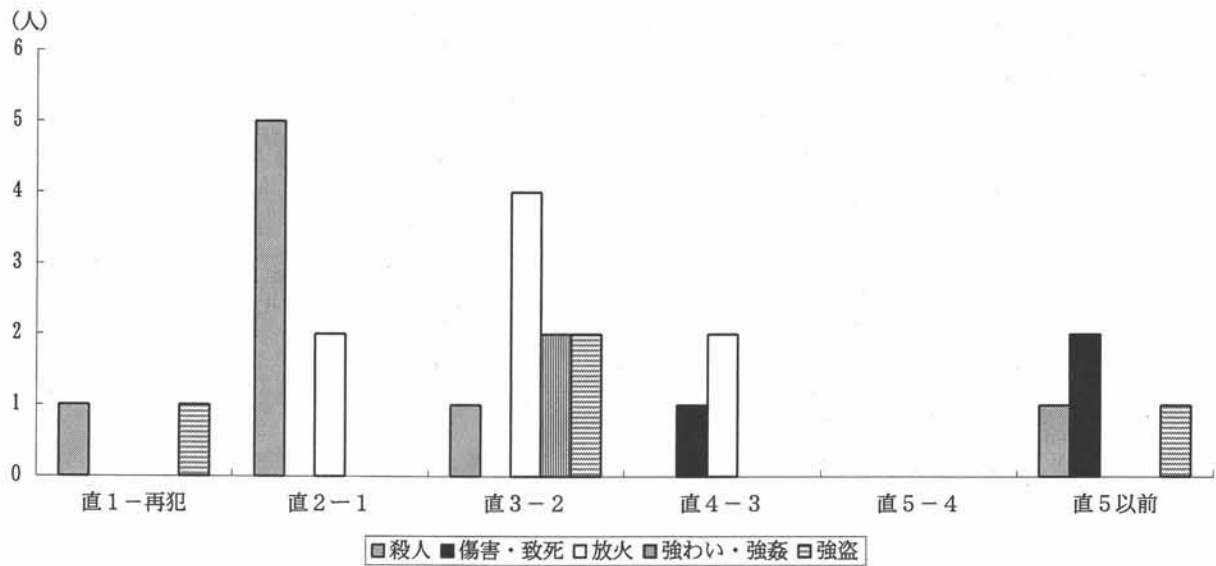
表107 犯罪群別問題飲酒癖出現期間

	総数	直1－再犯	直2－1	直3－2	直4－3	直5－4	直5以前
総数	25	2	7	9	3	—	4
殺人	8	1	5	1	—	—	1
傷害・致死	3	—	—	—	1	—	2
放火	8	—	2	4	2	—	—
強わい・強姦	2	—	—	2	—	—	—
強盗	4	1	—	2	—	—	1

注 1 法務総合研究所の調査による。

2 不明，なしを除く。

図110 犯罪群別問題飲酒癖 出現期間



注 法務総合研究所の調査による。

(エ) 問題飲酒癖 被害者

問題飲酒癖発現時の被害者の種別について、分類したのが、表108、図111である。飲酒時以外の問題行動の分布（前記ア(エ)の表104、図107）と対比してみると、殺人、傷害・致死群で、「問題行動」時に比して「飲酒癖出現」時に、被害者となる「家族」は比較的少なく、家族や隣人以外の「ほか知人」が比較的多く、他の群では問題行動時と飲酒癖出現時とで、被害者の種別にはほとんど差がないことが分かる。

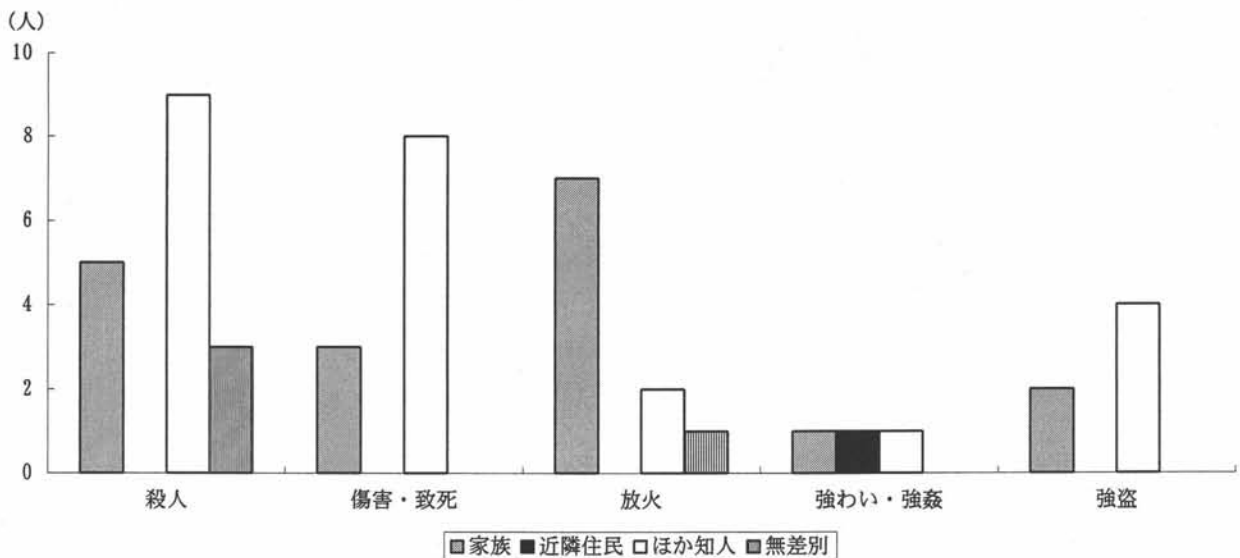
問題飲酒癖は、家庭内はもとより家庭外でも出現することも多いことがうかがわれるので、家庭外での飲酒癖出現時に適切な措置を講じることができれば飲酒を起因とする再犯を抑止する途ができるのではないだろうか。

表108 犯罪群別癖被害者種別

	総数	家族	近隣住民	ほか知人	無差別
総 数	47	18	1	24	4
殺 人	17	5	—	9	3
傷 害 ・ 致 死	11	3	—	8	—
放 火	10	7	—	2	1
強わい・強姦	3	1	1	1	—
強 盗	6	2	—	4	—

注 1 法務総合研究所の調査による。  
2 不明、なしを除く。

図111 犯罪群別問題飲酒癖被害者種別



注 法務総合研究所の調査による。

### 3 再犯の犯行の経緯・状況等

#### (1) 再犯の犯行時期

##### ア 刑事処分後再犯までの期間

##### (ア) 直近1処分後再犯までの期間

刑事処分後<sup>(注63)</sup>から再犯まで<sup>(注64)</sup>の期間(月数<sup>(注65,66)</sup>)の長短は、再犯への危険性をはかるための一つの徴表と思われるが、直近1刑事処分後再犯までの期間の分布は表109, 110, 図112, 113, 114のとおりである。

期間の平均値は、34.7月から55.1月と幅があるものの、ほぼ3年(36月)から5年(60月)の範囲に入っている。各群ごとにみると、強盗群が34.7月と最も短く、放火群が55.1月と最も長く、殺人、傷害・致死、強わい・強姦群は、47.3月から49月とその中間である(図113)。

分布状況のピーク(最頻値)は、殺人群では、0～12月と25～48月に、傷害・致死群で25～36月に、放火群で25～36月、強わい・強姦群で13～24月、強盗群で25～36月となっており、いずれも4年以内にピークが来ている(図114)。

また、殺人、傷害・致死群で48月以内、放火群で60月以内、強わい・強姦、強盗群では、36月以内で50%以上を占め、全ての群で60月以内(5年内)で60%以上を、84月以内(7年内)で75%以上を、96月以内(8年内)で85%以上を、それぞれ占めている(図112)。

各群を対比すると、強盗群で3年内で70%を超える者が再犯を犯しているなど他に比して早期に再犯が出現する割合が多く、殺人、傷害・致死、強わい・強姦群は平均的、放火群は25月以降(2年超)に

(注63) 刑事処分日は、不起訴処分日、起訴された場合の第一審判決宣告日とした。控訴・上告のため確定時期が遅くなる場合もあり、起訴された場合については、最終的な処分確定日との間にずれが生じることになるので、最終処分確定日から再犯までの期間はこれより更に短いことになる。刑事処分がなされて最終的に刑事手続から解放された日から再犯までの期間については、後記イの刑事処分後釈放までの期間を参照されたい。

(注64) 再犯までという場合の「再犯日」は、「重大前科歴5罪種の再犯の最初の着手日」とした。

(注65) 月数は、端数については1日でも1月として計算した。従って1月と1日の場合は、2月と計算した。

(注66) 再犯の着手時期の記録がないため不明確の場合については、除外した。